

第3回守山市総合計画審議会 議事録

開催日時：令和7年2月14日(金)午後5時30分～午後7時40分

開催場所：守山市役所2階防災会議室

出席者：

(委員) 辻田素子、石田俊治、杉岡秀紀、大崎裕士、石上僚、岩崎優希、北村妙子、
高津真一、小森慎也、佐子友彦、根木山恒平、村田和哉、桃谷香葉

(守山市等) 森中市長、福井副市長

総合政策部 木村部長、稲田次長、森口次長

総合政策部企画政策課 中島課長、田中参事、大嵯係長、荒川主任

株式会社地域未来研究所 田淵技術顧問、貞松主任研究員

傍聴 6名

1. 開会

2. 市長挨拶

3. 会長挨拶

4. 議題

(1) 将来都市像について（意見交換）

辻田会長	将来都市像等について、ご質問・ご意見等がありましたらお願いします。
杉岡委員	全国に1,718市町村がある中で、オリジナル性を持たせることは非常に重要です。その点、市民ワークショップから出てきた「攻山守山」というフレーズが将来像に盛り込まれているのは、とてもよいと感じました。 いくつか問題提起をさせていただくと、まず、「私の」と個人を主語とするか、「私たちの」とするかによって、ニュアンスが変わります。 次に、「サステナブル」という言葉について、文化庁の『カタカナ語の認知率・理解率・使用率』によると、この言葉は120位以内に入っておらず、まだまだ浸透していないと考えられるので、「持続可能な」に置き換えてもよいのではないでしょうか。 最後に、分野別政策の並び順は非常に重要です。 他の自治体では、「医療福祉」「安心安全」の順に並べることが多いですが、守山市では「つながり」から始まっています。これは、市として「つながり」を一番に大切にしますというメッセージであり、市の姿勢そのものだと思います。

市長	「サステナブル」という言葉は、令和7年度予算案の中でも使用しています。 どこまで認知されているのかという点がありますが、一方で、「この単語はどういう意味だろう？」と関心を持ち、調べてもらえるという効果も期待できていると思っています。
辻田会長	国レベルでは120位以内に入っていないかもしれませんが、守山市ではベスト10に入っている可能性もあります。 やはり分かりやすい言葉がよいということもあるでしょうし、そのあたり、ご意見をいただければと思います。
石田副会長	市民からすれば、分かりやすい方がなじみやすいのではと思います。
根木山委員	守山のまちが何年続いているのかは分かりませんが、「持続可能な」という表現ではなく、例えば、千年続いているのであれば、「千年続くまち」といった形にするのもよいかなと思います。
石田委員	「私の」というと一人称、個人で、「私たちの」というと、自分も含めてみなさんという表現になります。 「われわれの」、「私たちの」の方がよいのではないかと思います。
大崎委員	市民憲章では「わたくしたち」という表現が使われているため、それを具体化する方がよいのではないのでしょうか。 また、「つながり」という言葉も出てくることから、個々の価値を強調するまちとして、単数ではなく複数の視点でまとめる方がよいだろうと思います。
辻田会長	ワークショップで「凸凹にあわせたまち」という意見が出ており、個人の個性を大切にし、一人ひとりの様々な思いを形にできることを強く訴えたいのであれば、「私の」とした方がより明確になるのではないかと思います。 どのあたりを強調したいかによります。
根木山委員	これからの時代は、仲間と生きること、つながりが大切ですので、「私たち」の方がよいという気がします。
北村委員	つながりを考えると「私たちの」という表現が適しているように思います。 しかしながら、学校において、子どもたち一人ひとりが思いを持ち、それを発信することが今の時代においては、とても難しいと実感していますので、多様な個性を尊重し、一人ひとりが主役という点で考えると、「私の思い」というのがまずそこにあってもよいのかなと思いました。
高津委員	ビジョンの基本構想ですので、このフレーズを聞いた時に、分かりやすくピンとくることが大切だと思います。 そういう視点が一番大切かと思います。
小森委員	複数形でもよい気もしますし、スローガンのようにとらえるなら、一人ひとりの個性を尊重するという意味で「私の」もよいような気がします。 中学生広場で「私の思い」というのがあり、聞き慣れているということもあります。
佐子委員	見た人、読む人の解釈、受け止め方によるので、どちらにも良さがありますが、

	語呂やイントネーションで、「私の」の方が強く印象に残るように思います。
村田委員	市民や子どもを巻き込んだ活動をしていますので、子どもがどちらを選択するかを考えると「私の」がしっくりくるように思います。 個人が確立し、充実しないと、他人を巻き込んで何かをしようという意識が生まれません。 一方で、幅広い世代を考慮すると「私たち」の方がいいのかもしれませんが。 また、「サステナブル」に関しては、そのままでよいと思います。 次のまちづくりを担う世代にあわせていくというのも、一つの考え方ではないでしょうか。
桃谷委員	印象に残るのは「私の」で、強いイメージがあり、ずっと心に入ってくる感じがします。「私たちの」も、みんなで一緒にという日本的な印象があり、この表現を好む人も多いと思います。 しかし、今の時代は個人の個性や意見を尊重する流れがありますので、今後10年を見据えた時には、少し強い表現ではありますが「私の」を用いる方がより印象に残るのではないのでしょうか。
大崎委員	皆さんの意見を聞いていると、「私の」も「私たちの」という言葉を取ってしまい、『『想い』がかなうまち』でもよいのではないかと思いました。
石上委員	表現は短い方がよいと思います。 「想い」という言葉についても、受け取る人により解釈が難しくなるので、ひらがな表現の方がよいのではと思いました。 また、キャッチフレーズに使われている「攻山！守山！」については、守山の語源は一般的には比叡山延暦寺の東の鬼門を東門院が守っていることに由来するとされています。しかし、ある歴史家によると、紀貫之が『古今和歌集』で詠んだ『白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色づきにけり』に由来するとも言われており、そもそも「守る」という意味ではないという説もあります。
岩崎委員	「私たちの」が一般的かもしれませんが、だからこそ別の表現を選ぶのもよいのではないのでしょうか。 一人ひとりで状況は異なるので、「私たちの」としてしまうと、少数派の方は、自分の意見はとりあげられないのではと感じてしまうかもしれません。 私の意見も想いもかなうという意味で、「私の」の方がよいと思いました。
市長	複数形か単数形か、あるいはどちらでも変わらないという意見もありましたが、どちらを選ぶかで、意味は変わってくると思います。 複数形にするとみんなの共通項があり、それを一緒にかなえましょうという意味になります。 しかし、今の世の中は、どんどん前に進んでいける人もいれば、家から出られない人もおり、色々な状況の人がいます。 多様性が重視される中で、あるべき姿は人それぞれであり、共通項を見出すこと自体が難しくなっています。

	それぞれ立場の違う市民が、自分の想いを出していくことができるまちにしていかなければならないという意味を込めて、市としては敢えて単数形にしているところです。 また、守山の由来には諸説ありますが、「守る」という説が多数派であり、市の名前でもあるので、ワークショップから出た意見でもあるので、守山のバランスの良さなどをしっかりと大切にするためにも、守るべきところは守り、攻めるべきところ変えるべきところは変えていくということで、そこは盛り込んでいきたいと考えています。
杉岡委員	総合計画は市の最上位計画でありながら、市民にとっては身近なものでなく、一人ひとりにまで、なかなか届きにくいのが現状です。 学校教育の現場など、こどもから大人まで市民が日常的に目にするような仕掛けをどう作っていくかも、セットで議論していく必要があると思います。 そういった仕掛けがあれば、「私の」という強いワードもより響くので、そのあたりが大きなポイントになるのではないかと思います。
石田副会長	「私の」は個人、一人称なので、個人の主義・主張を通してけると解釈された場合に行政としてどのように対応するのかというところが心配です。
辻田会長	「私の『想い』がかなうまち」という表現は、主体性があまり感じられず、その環境を地域や行政が整えてくれると捉える人が出てくるのではないかと思います。 このまちを良くするために市民が主体的に関わっていくというニュアンスをもう少し強調できればと思い、自分なりに考えてみましたが、なかなか良い案が浮かびません。 杉岡委員の発言にもあったように、市民が自分事として捉えられるしかけを作ることが大切だと思いますので、そのあたりも含めてご意見いただければと思います。
村田委員	それぞれの解釈に委ねるということでは、大崎委員の発言のように、シンプルに『『想い』がかなうまち』の方がしっくりきました。
根木山委員	「かなう」ではなく「想いが大切にされる」というニュアンスの方が個人的にはよいのではないかと思います。
桃谷委員	「かなう」は、確かに人任せで、受け身な感じがしますので、「かなえる」とすることで、一人ひとりが自ら行動を起こし、想いを実現するという意味を持たせることができるので、「みんなが『想い』をかなえるまち」とすればよいのではないかと思います。
小森委員	ストレートに強くメッセージを伝えたいのか、それとも、それぞれが自由に解釈できるように、あえてぼやかすのかという、考え方によると思います。 また、杉岡委員からのご意見にもあったように、この将来像は行政内だけで使われるものではなく、イベントのチラシなど、市内のあらゆる場所で目にする言葉になればよいと思います。

辻田会長	今までの議論では、ぼやかしておきたいという意見とストレートに伝えたいという意見が半々なのかと思います。
杉岡委員	兵庫県朝来市では、総合計画の将来像の実現に向け、市民の意見をもとに『一人ひとりの「やってみよう」を応援するみんなの合言葉』をつくり、それを LINE スタンプとして展開することで、市民が自発的に広めています。 そういった意味では、例えば「私の」ではなく「一人ひとり」や、「想い」ではなく「やってみよう」にするとか、皆さんで言葉を連想していく中で、これだというものが出来ればよいのではないかと思います。
辻田会長	将来像については、本日の会議で決定する必要があるのでしょうか。
市長	本日のご意見を踏まえて、事務局で検討しますので、自由に議論していただければと思います。
桃谷委員	「サステナブル」は、「持続可能な」と言われますが、ピンとこないところがあり、どういった意味を含むのかを教えてください。
市長	「サステナブル」という言葉は、もともとは環境や資源の循環といった考え方から生まれてきたものです。 市として様々な施策を拡充したくても、そもそも財源がないとできませんし、市民活動や地域活動も今まで通りのやり方では維持できなくなっています。 人口減少が進む中で、くらしや税収の確保も含め、どのように維持・発展させていくのかという意味も含めて、この言葉を使っています。 今回、事務局でも様々な案を検討しましたが、短くて読みやすいということも大切だと思います。
高津委員	50 年先のめざすまちの姿である「豊かな田園都市」は、短いフレーズでありながら、ずっと心に入ってきます。 この前提がある中で、マイルストーンとしての 10 年後のまちの姿との関係性を考えながら、将来像を描くことも重要ではないかと思います。
辻田会長	「豊かな田園都市」とのつながりについても検討が必要かもしれません。
佐子委員	「豊かな田園都市」は、まちづくりとして、計画策定時にハード面など物質的なアプローチが時代的にあったのではないかと感じています。 これからの時代、A I が発達し、独りぼっちでもコミュニケーションツールが話し相手になり、生活に必要なものはアプリで手に入れられる環境になります。 そういう意味では、一人ひとりの個人にフォーカスを当てたひとをつくるまちづくりは、これからの時代によりフィットしていると思います。 また、「かなう」という言葉に他力本願的な印象を受けるという意見がありましたが、多様性を認め、様々な人とつながりながら、時には人や行政に頼りおんぶにだっこでもやっていけるというニュアンスが伝わった方がよいと思います。 例えば、「かなうまち」の方が、転入者にとっても、まちへの期待感があり、優しい印象も受け、誰かがやってくれるのかなという感じもある。それくらい間口が広いまち、懐の深いまちという印象が出るのではないかと思います。

	また、サブタイトルにある「攻山！守山！」は強い言葉なので、それに負けないような印象をもたせるという意味でも、「私の」の方が、バランスがとれてよいと感じました。
市長	「豊かな田園都市」について、昭和の頃に掲げた「のどかな田園都市」を基軸としつつ、まちが成長、発展を遂げる中で、市政 50 周年の議論の中で、これからの 50 年でどのようなまちを目指すのかという議論から「豊かな田園都市」を掲げたという経緯があります。
石田副会長	「豊かな田園都市」というフレーズはとても素晴らしいと感じています。 守山は、都市的な部分と田園（農地）が共存し、農と住のバランスのとれたまちですので、そうした守山の特徴を的確に表しているからこそ、50 年先だけでなく、未来永劫にわたり受け継いでいくことを願っています。
小森委員	「攻山！守山！」はワークショップの中でも、良い言葉が出たのではないかと いう感触があったのではと想像します。 キャッチフレーズとして非常におもしろいので、サブタイトルにとどめるのではなく、将来像に使うのもよいのではないのでしょうか。
杉岡委員	インパクトという点で、「豊かな田園都市」という表現は、やや一般的かもしれません。 京田辺市でも「緑豊かで健康な文化田園都市」という言葉が使われており、国が掲げる「デジタル田園都市」の中にも使われています。 また、学研都市が筑波と京阪奈にあります。京阪奈では「文化学術学研都市」として差別化を図っています。 こうした視点を踏まえると、「豊かな田園都市」をより際立たせるためのしかけがあってもよいのかもしれない。
辻田会長	本日議論いただいている 10 年後の将来都市像は、力強くキャッチーな言葉が多く、メッセージもはっきりと伝わると思います。
岩崎委員	私は、初めて守山に来た時に、意外とまちだなという印象を受けました。 琵琶湖大橋の手前まで来ると対岸に山々が広がり、広大な景色が目の前に広がって、ここに住みたいと思いました。 そういう意味では、「豊かな田園都市」は、すでに実現しているのではないかと思います。私自身「ほどよく田舎でほどよくまち」というキャッチフレーズをつけたことがありますが、何をするにも不便ではなく、琵琶湖や豊かな自然もあり、とてもよいまちだと気に入っています。 だからこそ、「豊かな田園都市」は、既になついていると思うので、50 年先の姿としては、もう一歩先を見据えた何かを付け加えたほうがよいのではないかと思います。
大崎委員	基盤となるのは市民憲章に掲げられている「のどかな田園都市」であり、長期ビジョンの将来像は 10 年間の個別チャレンジという位置づけだと思います。
辻田会長	もし、他にご意見がありましたら、後日事務局に伝えていただくことにし、議題

	1 を終了とさせていただきます。
--	------------------

(2)人口ビジョンについて（意見交換）

辻田会長	守山市の人口ビジョンについて、意見をお伺いしたいと思います。
杉岡委員	日本全体において人口減少が進む中で、88,000 人を目指すという人口増の方向性を打ち出せる自治体はなかなかありません。 人口増加の勢いは鈍化しているものの、まだ増えているからこそ、このような目標を打ち出せることは、すごいことです。 ポイントとなるのは、人口の数だけでなく、その人口の中身であり、働き世代を維持してくという人口構成です。 また、もう一つの視点として、政府では、二地域居住の促進に向けて取り組んでいるところですが、市を支えているのは、住んでいる人だけではなく、通勤・通学者、観光客等の交流人口、関係人口についても、触れるべきだと思います。
市長	まちに住む人以外にも、まちに関わってもらうことをしていかなないと、まちの維持活性化が維持できないという視点は大事だと思いますので、長期ビジョンの中でどこまで盛り込めるか分かりませんが、しっかりと考えていきたいと思っています。 杉岡委員からご指摘がありましたが、私自身も、人口の数字そのものよりも、「支える人」と「支えられる人」の人口バランスが重要だと考えています。 高齢者層が増えますが、技術革新や、高齢者の就労拡大により、緩やかな人口増加の中で、今と同じ、あるいは今よりも暮らしやすいまちをつくることのできるのではないかと考えています。
大崎委員	長期ビジョンの中に人口ビジョンが位置付けられるなど、分かりにくい構成になっていますので、文言を整理された方がよいのではないのでしょうか。 「人口ビジョン」という表現ではなく、「維持したい人口数値目標」とする方が、意図が分かりやすくなるのではと思います。
杉岡委員	参考までに、文化庁の『カタカナ語の認知率・理解率・使用率』によると、「ビジョン」という言葉は 36 位で、84.1%が認知されている言葉なので、ぎりぎり使っても大丈夫かと思っています。
石田副会長	目標達成のため、子どもを生み育てやすい環境整備を行うと書かれていますが、若い人や女性に守山市を選んでもらえるまちづくりや、子育て世代が働きやすい環境を整えることが重要だと思います。 そのためには、若い世代の多様な意見を十分に反映し、市として具体的な施策につなげていくことを是非お願いしたいと思います。
辻田会長	20 歳～64 歳の人口比率の 56%を維持するということですが、社会増減や自然増減の数値はどのようになっているのでしょうか。
市長	それぞれ率をかけて算出しているため、内訳として具体的な数値を出しているわけではありません。 ただし、子どもを生み育てやすい環境整備は自然増につながりますし、守山市は

	高度地区という高さ制限を設けたこともあり、新築マンションが建設されず、住宅供給が不足していることから、一定の開発を可能とすることで、社会増にもつながるかと考えています。
根本山委員	人口目標自体は良いと思いますが、市長がおっしゃったように数字以上にバランスが重要だと思います。 都市計画の観点から、今後の住宅需要の見通しやどのようなまちになっていくのかについて、教えていただければと思います。
市長	令和7年から8年にかけて都市計画マスタープランの改定を行う中で、具体的には今後、議論していきますが、エリアごとに課題があると認識しています。 例えば、駅周辺では高さ制限を設けた結果、その条件を適用してから3年間、新しいマンションの建設が進んでいません。 一方、調整区域では、地区計画制度を導入しました。 本来は、元からある集落の維持・活性化を目的としたものでしたが、実際には集落の外側の農地が宅地化され、集落内の住み替えが想定よりも進んでいないという課題が生じています。 また、村田製作所の研究施設や工場など企業誘致が進んでいますが、守山市では、住宅需要、特に賃貸の需要に対して、供給が不足しています。 しかし、調整区域では賃貸住宅の建設が認められていないため、需要に対応できていないのが現状です。 エリアごとにこうした制度上の課題があるため、それらを解決することでバランスのとれた都市計画を進めていきたいと考えています。
大崎委員	88,000人という人口目標は妥当な数字だと思います。 目指すまちづくりの視点として「ひと」、「くらし」、「まち」、「環境（土台）」4つ挙げられていますが、「環境（土台）」に書かれている具体的内容は「ひと」や「まち」に関わるものもあります。 一方で、総合戦略をみると「まち」、「ひと」、「しごと」の3つに絞られているので、目指すまちづくりの視点における「環境（土台）」を、どこかに包含する形にした方が分かりやすいのではないかと思います。
市長	「環境（土台）」に書かれているものは、「ひと」、「くらし」、「まち」すべてに共通する土台で、どこかに割り振られるものではないという認識です。
辻田会長	事務局で少し検討いただければと思います。 一方で中位の人口推計で、この構成比を維持することで、「豊かな田園都市」が維持されるのかというところが気になります。
事務局	市が目指すのは、大都市の近郊に位置しながらも自然と住環境が共存し、職住近接で独立して生活できるまちで、これこそが、市として考える「豊かな田園都市」の姿だと思います。 そのために、一定の自然を残しつつ、産業開発も進め、住宅も整備するというところで、決して自然だけ守るという思いではないため、その点では今回の方向性と

	合致していると考えています。 また、今が人口増を目指せる最後のチャンスだとも思っています。 どこかのタイミングで人口減少は避けられないものの、少しでもその時期を遅らせ、さらに人口構成の中間層を増やすことで、まちの活力を維持する必要があると考えています。 その意味で、「豊かな田園都市」と今回のビジョンの考えは、一致していると思っています。
市長	技術革新などにより、やり方を変えていかなければ、今のままのやり方では、50年後は、まちとして成り立ちません。 守山市にはまだ余力がありますので、今のうちに新たな仕組みを構築していく必要があります、この10年間で勝負だと考えています。
高津委員	人口増を目指す自治体がほぼない中、88,000人を目指すとなると、課題もそれだけハードになるので、総合戦略等、具体的な取組内容が大事になってくると思います。
杉岡委員	京丹後市では、当時56,000人ほどだった人口がV字型回復するという人口ビジョンを作成しましたが、結果的には50,000人を切ってしまいました。 しかし、守山市は都市近郊であるだけでなく、高齢化率が高くないなど、様々な条件が揃っているので、他の市町村と比較することはあまり意味がないと考えます。 とはいえ、将来的に人口減少が加速することは間違いないので、そのスピードにどう対応し、どのような施策を打っていくかということが重要であると思います。 守山市は例外的に恵まれたまちですので、その特性を生かした議論ができると思います。 野心的な目標ではありますが、適切な政策を打っていければ、結果は十分に出ると思いますので、期待も込めて頑張ってもらいたいと思います。
大崎委員	現状の人口は、第5次総合計画の人口ビジョンで掲げた目標人口や、社人研の推計値を上回っています。 これは、これまでのまちづくりの取組みの成果であり、過去を振り返りながら、施策をブラッシュアップしていくことで、決して無理な数値ではなく、十分に達成可能な数値目標だと思います。
市長	これまで国の想定を上回る伸びをしているので、この傾向を続けることで、十分達成できる数値だと考えています。 一方で、この2年間の人口増の鈍化は想定を上回る状況で、社会増減については明らかに住宅供給不足が要因なので、自然増も含めて、どちらもしっかりと対策をしていくことが重要だと考えています。
辻田会長	以上で議題2については終了させていただきます。

(3)総合戦略について（意見交換）

辻田会長	総合戦略の枠組みについて、意見をお伺いしたいと思います。 ここにプラスしたいキーワードなど、そういう視点があればいただければと思います。
杉岡委員	守山市の戦略では、「しごと」、「ひと」、「子育て」、「魅力的なまちづくり」の順番となっています。一方で、長期ビジョンでは「ひと」や「つながり」が最初に来ています。 自治体の計画ですので、国の順番に必ずしも従う必要はないので、長期ビジョンとの整合性を考え、「ひと」が一番にくるような戦略でもよいのではないかと思います。
根木山委員	守山市では、農水産業の資源が豊富であり、その分野でデジタルを活用することができると思いますが、具体的な活用のイメージはどのようなものでしょうか。
市長	デジタルの力など、新しい技術を活用することで、人の作業時間の短縮等、生産性を向上させることができるということです。
辻田会長	例えば、田畑へのカメラの設置による遠隔での農産物の管理や適正な収穫時期の把握など、様々な活用が考えられると思います。
根木山委員	市街化調整区域は、農業生産を前提に、農家が住むエリアとして設定されたものですが、農業に関わらない人が地域に増えていくことに対して、実際、地域の方はどのように感じておられるのでしょうか。
石田副会長	石田町は、明治・大正・昭和通じて約 60 戸の小さな農村集落で、市街化調整区域に指定されており、また、そのうち約半分は青地の農業専用地域となっています。 高度経済成長期に一つの工場が建設されましたが、全体として住と農のバランスがとれた田園都市の典型だと思っています。 約 10 年前に、市の方から地区計画の話があり、地域内で議論を重ねました。 「農業を潰すことになる、田んぼを潰すことになるがそれでよいのか」という意見もありましたが、地域の活性化のためには新しい住民を受け入れることも必要だということになり、地域住民の賛同を得て、農と住のバランスをとりながら、石田町を守っていこうということになりました。 「農業を守ること」と「まちの活性化」の両立こそが、石田町の原点であり、大切にしたい考え方だと思っています。
市長	市街化調整区域は、60 年前の制度ですが、ライフスタイルや交通等、時代背景が大きく変わる中、制度ができた 60 年前から変わっていません。 現在のニーズに合わせて制度を見直す手段もあるので、そういったものも研究していこうと考えています
杉岡委員	綾部市では、その制度を撤廃しており、国と調整する中で、見直ししていくこともできます。
岩崎委員	私は、まさに総合戦略に基づき、移住してきた当事者です。 総合戦略の基本目標の順番について、仕事があれば他府県から移住する人も増え

	るため、「しごと」を一番にもってくるのもよいのではないかと思います。 また、調整区域の都市計画の制度は複雑なので、移住者は住む場所を探すのに苦労しています。
石田副会長	自治会には、役員や民生委員、福祉協力員など様々な役がありますが、担い手不足が深刻化し大きな課題になっています。 皆さんで議論している長期ビジョンの実現についても、具体的に活動する人材が不可欠ですので、行政としても、人材確保のための具体的な手立てを考えていただきたいと思います。
市長	様々な分野で担い手不足という話は聞いていますし、市としても活動に参加しやすい工夫や負担軽減について取り組んでいます、引き続き、そういったものも含めて今後もしっかりと考えていく必要があると思っています。
辻田会長	活発なご意見ありがとうございました。 それでは以上で本日の議事は全て終了となります。議事の円滑な進行にご協力いただき誠にありがとうございました。

5. その他

- ・次回は5月上旬から中旬に開催とし、後日日程調整を行う。

6. 閉会